

第36回 第4章 近代国家の形成と国民文化の発展

## 日中戦争

執筆・講師  
季武嘉也

### 学習のねらい

1920年代の日本は、民主化が最高潮に達し同時に国際平和を追求した時代であった。しかし、1930年ごろからは一転して戦争へと突き進んでいく。そのきっかけとなったのが1931年の満州事変であった。なぜ満州事変は起きたのであろうか。そして、その後の日本はどのように1937年の日中戦争へと向かっていったのであろうか。

### 満州事変

蒋介石率いる中国国民政府は北伐によって統一に成功し、さらに外国権益の回収をめざした。一方、不況にあえいでいた日本は、今後、発展が期待される重化学工業の資源を確保したり、増加する人口を海外に移民させるため、中国東北部の満州に強い関心を持っていた。こうしたなか、日本の関東軍は1931年9月18日に柳条湖事件を引き起こした。自ら鉄道を爆破しながら、それを口実に満州・東部内蒙古で軍事行動に出たのである。この満州事変に対し、若槻礼次郎や犬養毅の政党内閣は不拡大方針をとったが、犬養内閣ののちに成立した斎藤実挙国一致内閣は日満議定書を交わし、関東軍が建国した満州国を承認した。

これに対し中国は、満州事変が勃発するとすぐに国際連盟に提訴し、日本の不当を主張した。これをうけ、国際連盟はリットンを団長とする調査団を派遣、調査団は中国の主権を認める内容の報告書を提出した。そして、国際連盟では日本軍の満州からの撤退を求める勧告案を採択したが、日本はそれを拒否し、国際連盟からの脱退を通告した。こうして、日本は国際社会から孤立する道を歩み始めることになった。

### 軍部の台頭

自由民権運動以来の夢であった政党内閣制が1924年から始まったが、軍部などはその経済政策や協調を基本とした外交政策に強い不満を持つようになった。そして、青年将校や民間右翼による軍事政権樹立をめざすクーデター未遂事件や要人暗殺事件が相次いだ。こうしたなか、1932年には海軍青年将校が犬養首相を暗殺する五・一五事件が勃発し、ついに政党内閣は幕を閉じることになった。

この事件に対し、国民の間からは青年将校への同情論が生まれた。こうした世論の変化を背

景に、しだいに軍部による国家改造を期待する声が強まり、また実際に軍部の政治進出が強まった。思想の統制も強まり、1935年には天皇機関説事件が発生するなど、マルクス主義のみならず、自由主義・民主主義思想にもおよんだ。

1936年、陸軍の皇道派の青年将校が軍事政権を樹立しようと二・二六事件をおこした。事件そのものは、天皇の強い意志を受けた海軍や陸軍統制派によって鎮圧されたが、事件後に成立した広田弘毅内閣では軍部大臣現役武官制が復活し、軍の意に沿わない内閣が出現することが難しくなった。

## 日中戦争のはじまり

満州国建国後、関東軍はさらに華北をも国民党勢力から切り離して日本の影響下におこすと華北分離工作をおこなった。この一触即発の状況のなか、1937年7月に北京郊外の盧溝橋ろこうきょうで日中両軍の武力衝突事件が起こると、戦火はまたたく間に華北から華中へと拡大した。当時の近衛文麿内閣は不拡大方針を採ったが、派兵を認めるなど断固たる処置をとることはできなかった。こうして、宣戦布告がおこなわれないうちに日中戦争が始まった。

日本は国民政府の首都である南京ナンキンの陥落に全力を注ぎ、それに成功した。そして、陥落によって意気が阻喪そそうしているであろう中国側と交渉に入ろうとした。しかし、国民党と共産党が第二次国共合作によって抗日民族統一戦線を形成していた中国軍の士気は高く、頑強な抵抗をつけて交渉には応じなかった。これに対し、近衛内閣は交渉をあきらめて傀儡政権かいらいを作る道を選択したため、日中戦争は泥沼化していった。そして、日本国内では戦争に対応するため、国民精神総動員運動によって国民の戦争協力への体制を整え、国家総動員法や国民徴用令によって人やモノの動員体制を築いた。